京都大学人文科学研究所共同研究実績・活動報告書

（2 年計画の 1 年目）

１．研究課題

生きる営みと環境問題

Living Activities and Environmental Issues

２．研究代表者氏名

岩城　卓二

IWAKI, Takuji

３．研究期間

2023 年 4 月-2025 年 3 月(1 年目)

４．研究目的

「環境問題の社会史的研究」班(2020・4・1～2023・3・31)は、日本の近世から現代までの環境問題について、とくに環境問題に関わる社会運動を中心に、運動が起こった現場の社会構造に注目しながら被害の現場に生きる住民の立場から環境問題とは何かを考えることを目的とした。本研究班は、その成果と課題をふまえ、山野河海におけるヒトの生きる営みを実証的に明らかにし、17 世紀以来のヒトの生きる営みが、いつ、何を契機に変容し、どのような要因によって環境問題として可視化されるのか、あるいは可視化されないのかについて明らかにしていく。日本列島に限らず世界の諸地域を対象とするが、「環境先進国」という前近代日本評価の再検討と戦後の高度経済成長の位置付け、人びとの環境認識、都市と農村の関係性、環境問題につながる山野河海を開発する側の論理など「生きる営み」に重点を置いて実証的に明らかにし、環境問題とは何かについて考えていきたい。

The "Social Historical Study of Environmental Issues" group (April 1, 2020 - March 31, 2023) examined environmental issues in Japan from the early modern period to the present day, focusing in particular on social environmental movements, taking into account the social structure of the actual sites where the movements evolved, and considering what the environmental issues are from the perspective of the residents living in the affected areas. Based on the results and the questions raised, this research group will empirically clarify human activities in the mountains, fields, rivers, and oceans, and identify when and at what point human activities have changed since the 17th century, and what factors make them visible or invisible as environmental issues. Our research is not limited to the Japanese archipelago but covers various regions of the world. We would like to reexamine Japan's pre-modern reputation as an "environmentally advanced country," the positioning of its rapid

postwar economic growth, people's perception of the environment, the relationship between urban / rural areas, and the logic of those who develop the mountains, fields, rivers, and oceans that lead to environmental problems, with an emphasis on "living activities," to empirically clarify what environmental issues are.

５．本年度の研究実施状況

令和４年度末で終了した「環境問題の社会史的研究」班を引き継ぎ、令和５～６年度の期間、「生きる営みと環境問題」班として実施する本研究班は、令和５年度、10 回の研究会を開催した。報告は、人の生きる営みが引き起こす環境破壊の過程や、公害と認知されて以降の活動等々を具体的事実をもって明らかにした。具体的には、沖縄戦における軍事環境の構築と、その選択的な再編、遺構がもつ政治的意味、「史上最大・最悪の公害」である福島原発事故の特質を「ふるさと」被害とし、被害の総体を把握する試み、公害の経験から地域の「生きる価値」を見いだす歩み、公害反対運動における女性の役割等が明らかにされた。またマルクスの物質代謝論と方法的二元論を参照しながら、現在、環境問題にどのように向き合うべきなのかの理論的検討も行った。初年度は、公害と認識される前、認識されて以降、認識後の取り組み、それらが表面的には解決した現在の取り組みと、時間的流れの中で環境問題と生きる営みの関係性を明らかにできた。

６．本年度の研究実施内容

2023-05-22　公害の経験から「地域の価値」をつくるとりくみ―倉敷・水島の公害地域再生と多視点性― 発表者 林美帆 公益財団法人水島地域環境再生財団

2023-06-26　青空がほしい再訪ー高度成長期戸畑の婦人会による反公害運動の道のり 発表者 小堀聡

2023-08-19　マルクスの物質代謝論と方法論的二元論 発表者 斎藤幸平 東京大学大学院総合文化研究科

2023-09-25　「大地」への帰還ーマラリア・農地改革・WWFー 発表者 松嶋健 広島大学大学院人間社会科学研究科

2023-11-24　福島原発公害最大の被害＝「ふるさと剥奪」 発表者 関礼子 立教大学社会学部

2023-12-28　黎明期の宇宙開発政策と「一元化」問題 発表者 福家崇洋

2024-01-22　軍事環境を生きるー沖縄戦における壕、共同体、生存可能性ー 発表者 石井美保

2024-02-05　18 世紀日本の時計駆動式宇宙模型と大衆向け宇宙論講義 発表者 平岡隆二

2024-02-19　〈視聴者〉の系譜ー環境制御の技術としてのテレビジョン― 発表者 岡澤康浩

2024-03-08　近世東北の鉄生産と銭、土砂、洋式高炉ー19 世紀の仙台藩を事例にー 発表者 高橋美貴 東京農工大学大学院農学研究院

７．共同研究会に関連した公表実績

なし

８．研究班員

所内

岩城卓二、石井美保、KNAUDT,Till、小関隆、小堀聡、酒井朋子、瀬戸口明久、高木博志、直野章子、平岡隆二、福家崇洋、藤原辰史、岡澤康浩

学内

石川登(京都大学東南アジア地域研究研究所)、岩島史(京都大学経済学研究科)、米家泰作(京都大学文学研究科)、岡安裕介(京都大学国際高等教育院)

学外

青木聡子(東北大学文学研究科)、HOLCA, Irina(東京外国語大学)、齋藤幸平(東京大学総合文化研究科)、高橋美貴(東京農工大学大学院農学研究院)、武井弘一(琉球大学国際地域創造学部)、町田哲(鳴門教育大学大学院学校教育研究科)、松嶋健(広島大学大学院人間社会科学研究科)、池田さなえ(京都府立大学文学部)、唐澤太輔(秋田公立美術大学大学院複合芸術研究科)、落合功(青山大学経済学部)、関礼子(立教大学社会学部)、田中雅一(国際ファッション専門職大学国際ファッション学部)、比嘉理麻(沖縄国際大学総合文化学部)、河野未央(尼崎市立歴史博物館あまがさきアーカイブズ)、橋本道範(滋賀県立琵琶湖博物館)、木村あや(ハワイ大学マノア校社会学部)

9．共同利用・共同研究の参加状況

区分	機関数（必須）	受入人数 総計	受入人数 海外研究者	受入人数 若手研究者（40歳未満）	受入人数 若手研究者（35歳以下）	受入人数 大学院生	延べ人数 総計	延べ人数 海外研究者	延べ人数 若手研究者（40歳未満）	延べ人数 若手研究者（35歳以下）	延べ人数 大学院生
人文研所属	1	13	1	1	0	0	80	4	5	0	0
（内女性）		(3)	(0)	(0)	(0)	(0)	(19)	(0)	(0)	(0)	(0)
京大内（人文研を除く）	4	5	1	1	0	0	21	3	4	0	0
（内女性）		(1)	(0)	(1)	(0)	(0)	(7)	(0)	(4)	(0)	(0)
国立大学	7	7	0	0	0	0	31	0	0	0	0
（内女性）		(2)	(0)	(0)	(0)	(0)	(10)	(0)	(0)	(0)	(0)
公立大学	2	2	0	1	0	0	4	0	1	0	0
（内女性）		(1)	(0)	(1)	(0)	(0)	(1)	(0)	(1)	(0)	(0)
私立大学	4	4	0	0	0	0	17	0	0	0	0
（内女性）		(2)	(0)	(0)	(0)	(0)	(8)	(0)	(0)	(0)	(0)
大学共同利用機関法人	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
（内女性）		(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)
独立行政法人等公的研究機関	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
（内女性）		(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)
民間機関	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
（内女性）		(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)
外国機関	1	1	0	0	0	0	4	0	0	0	0
（内女性）		(1)	(0)	(0)	(0)	(0)	(4)	(0)	(0)	(0)	(0)
その他　※	2	2	0	0	0	0	8	0	0	0	0
（内女性）		(2)	(0)	(0)	(0)	(0)	(4)	(0)	(0)	(0)	(0)
計	21	34	2	3	0	0	165	7	10	0	0
		(12)	(0)	(2)	(0)	(0)	(53)	(0)	(5)	(0)	(0)
※「その他」の区分受入がある場合具体的な所属等名称を記載：例）高校教員 無所属の場合は機関数０とカウントし、この欄の記載不要	尼崎市立歴史博物館あまがさきアーカイブズ、滋賀県立琵琶湖博物館										

10．本年度 共同利用・共同研究を活用して発表された論文数

	共同利用・共同研究による成果として発表された論文数		うち国際学術誌掲載論文数	
①人文研に所属する者のみの論文（単著・共著）	11		0	
②人文研に所属する者と人文研以外の国内の機関に所属する者の論文（共著）	0	(0)	0	(0)
③人文研以外の国内の機関に所属する者のみの論文（単著・共著）	0		0	
④人文研を含む国内の機関に所属する者と国外の機関に所属する者の論文（共著）	0	(0)	0	(0)
⑤国外の機関に所属する者のみの論文（単著・共著）	0		0	

本年度発表されたインパクトファクターを用いることが適当ではない分野等

	雑誌名	掲載論文数	掲載年月	論文名	発表者名
1	ユリイカ	1	R5.4	牧野富太郎の山歩きー植物採集の王国	瀬戸口明久
2	Fujihara Tatsushi ed., Handbook of Environmental History in Japan Fujihara, Tatsushi ed.,	1	R5.4	The 20th Century around Tokyo Bay: Life, Production and Environment	小堀聡
3	Handbook of Environmental History in Japan	1	R5.4	Environmental Problems Caused by the Shinkansen in Nagoya City	青木聡子
4	洋学	1	R5.5	開陽丸引き揚げ文書と梅文鼎『暦算全書』	平岡隆二
5	毎日新聞	1	R5.5	脱炭素電源法案「原発運転が責務」の危険性	小堀聡
6	地域社会はエネルギーとどう向き合ってきたのか　シリーズ環境社会学講座 2	1	R5.6	原発に抗う人びと――芦浜原発反対運動にみる住民の闘いと市民の支援	青木聡子
7	Historical Studies in the Natural Sciences	1	R5.6	The Puzzle of the Thinly Coated Pearl: Aquacultural Ecology and the Politics of Density in Ago Bay	Kjell David Ericson
8	近世日本のキリシタンと異文化交流	1	R5.7	キリシタンと時計伝来	平岡隆二
9	近世日本のキリシタンと異文化交流	1	R5.7	「キリシタンと時計伝来」関連史料	平岡隆二
10	世の中を知る、考える、変えていく	1	R5.7	環境をめぐる人々の取り組みは世の中をいかに変えるのか？	青木聡子
11	学術の動向	1	R5.7	報告・公開シンポジウム『学術と連携した質的確保に向けて』	関礼子

12	信州から考える世界史	1	R5.7	信州の産業と経済―世界を魅了し、日本を支えた信州産生糸	池田さなえ
13	女性白書 2023	1	R5.8	食料危機打開の方向と農業女性	岩島史
14	コモンの自治論	1	R5.8	市民科学	A.H. Kimura
15	文化人類学	1	R5.8	景観の力学を記述する	石川登
16	文化人類学	1	R5.9	近世の『山里』における社会変化	町田哲・石川登・内藤直樹
17	日本塩業の研究	1	R5.9	塩業諮問会の開催	落合功
18	醸造業の展開と地方の工業化	1	R5.9	近代前期、東京近郊の醤油製造業と醤油業界	落合功
19	日本史研究	1	R5.9	近世東北における土砂流出・堆積問題と流域ー近世後期の仙台藩領を事例としてー	高橋美貴
20	Intellectual Property and the Design of Nature	1	R5.9	Modified Pearl Oysters and Repeatable Peaches: Cultivation, Invention, and the Laws of Nature in Twentieth-century Japan	Kjell David Ericson
21	歴史学研究	1	R5,11	コード化された自然と村落	橋本道範
22	配信芸術論	1	R5.10	機械化時代の音楽・科学・人間	瀬戸口明久
23	思想	1	R5.10	巨大なものとしての科学	瀬戸口明久
24	環境と公害	1	R5.10	いわき市民訴訟・未除染下の生活と『ふるさと損傷』	関礼子
25	季刊民俗学	1	R5.10	笑いの向こうにみる紛争と分断の経験――北アイ	酒井朋子

				ルランド・ベルファストの日常経験の多面性	
26	語り継ぐ経験の居場所――排除と構築のオラリティ	1	R5.11	上手な運動の終い方？――オラリティと承認の多元性	青木聡子
27	年報　村落社会研究	1	R5.11	農業経済学の研究動向	岩島史
28	毎日新聞	1	R5.11	気候変動問題と日本 新たなルール作り必要	小堀聡
29	法と民主主義	1	R5.11	語られない被害は加害責任を減軽する	関礼子
30	Disaster and Justice in the Aftermath of 3.11 eds	1	R5.11	Seeking justice	A. H. Kimura
31	洛北通信	1	R5.11	最適化しない生き方	池田さなえ
32	Japanese Research in Business History	1	R5.12	Sinan Levent. Sekiyu to nashonarizumu: Chūtō shigen gaikō to “Sengo Asia-shugi” [Oil and Nationalism: Middle East Resource Diplomacy and “Postwar Asianism”]. Kyoto: Jimbun Shoin, 2022.	小堀聡
33	京都府立大学学術報告　人文	1	R5.12	明治期日本の大農場における経営・技術思想－品川弥二郎所有・北海道農牧場の人的関係分析から	池田さなえ
34	歴史科学協議会編『深化する歴史学：史資料からよみとく新たな歴史像』大月書店	1	R6.1	「明治期政治家私文書のなかの「書類」	池田さなえ
35	汚穢のリズム－きたなさ・おぞましさの生活考	1	R6.1	分かつ－豚が「汚くなる」とき	比嘉理麻
36	農業史研究（第 58 号）	1	R6.3	豚たちの戦後史－激変する人と動物の関係と沖縄	比嘉理麻

				社会－	
37	ZINBUN	6	R6.3	From Experience to Anti-Nuclear Convictions: Early Years, Crises, and Evolution of the *Nihon Hidankyō*	Naono Akiko

11. 本年度共同利用・共同研究による成果として発行した研究書

	研究書の名称	編著者名	発行年月	出版社名	国際共著
1	ヘーゲル	斎藤幸平	R5.4	NHK 出版	
2	地域社会はエネルギーとどう向き合ってきたのか	茅野恒秀・青木聡子	R5.6	新泉社	
3	コモンの自然界	斎藤幸平	R5.8	集英社	
4	福島からの手紙――12 年後の原発災害	関礼子	R5.8	新泉社	
5	福島原発事故は人びとに何をもたらしたのか――不可視化される被害、再生産される加害構造	関礼子・原口弥生	R5.9	新泉社	
6	マルクス解体	斎藤幸平	R5.10	講談社	
7	語り継ぐ経験の居場所――排除と構築のオラリティ	関礼子	R5.11	新曜社	
8	紀伊山地はなぜ歴史の舞台になったか－山村の地域誌－	米家泰作	R6.2	古今書院	

12. 博士学位を取得した学生の数

なし

13. 費目の 30%を超える大幅な変更があった場合の変更理由

なし

14. 次年度の研究実施計画

令和 6 年度は、令和 5 年度に引き続き研究報告を重ね、「環境問題の社会史的研究」班の成果とあわせて、人の生きる営みが環境に負荷を与えている実態、それが環境問題と認識され、被害者による原因者への抗議活動・改善に向けた交渉に至る背景、公害と認知され、表面的には問題が終結して以降、そこに生きる人々が公害をどう歴史化し、語り継ぎ、地域の再生に取り組んでいったのか、を時系列的に明らかにするとともに、人の生きる営みが環境に負荷をかけざるを得ない以上、未来に向けてどういう生きる営みを展開していくのかといった哲学的課題にも取り組みながら、令和 7 年度以降、刊行を予定している論文集における班員の分担課題を決め、成果のとりまとめ方についても議論する。計 12 回の研究会を予定しているが、それ以外に、公害訴訟関係者への聞取りや、現地の巡見も実施したいと考えている。

15. 研究成果公表計画および今後の展開等

令和 6 年度の後半は、成果論文集の刊行に向けて、班員の役割分担も決めていくが、班員が論文を執筆し、読み合わせをする時間を考慮し、刊行は令和 8 年度を予定している。